

造形体験の中で見つけたよさを友だちと共有し高め合いながら、表現の追求をしていく子ども

ー 小学5年「春季トレーニング中！運動をしている自分の体の動きをねん土で表そう」の実践から ー

1 授業の構想

(1) 子どものとらえについて

次の文章は、5年生児童が紙粘土を使って表したい人物の動きについて、発想したことを文章化したイメージ文である。

[イメージ文] ぼくが表したい動きは、おいかけ走で追いつかれそうになって、あせったことです。その動きにこめたい気持ちは、もうすぐぬかれそうな時、「マジヤベェ」という責められた気持ちになったことです。 (児童A)

イメージ文では、漠然としていた動きのイメージを明らかにすることで、自分が表そうとしていることに自分の感情が反映され、そのために必要な動きをとらえるための基盤となっている。

切り取った瞬間の動きを骨組みのポーズに表すときも、その場面の様子が子どもの心情とともに言語化され、以降の紙粘土による立体表現への基盤となっている。

今日は図工で肉づけをしました。今日は中心的に足の肉づけをしました。足は、ぼくが考えるに四つ、特に注意してやる所があって、ふともも、ひざ、ふくらはぎ、かかとで、太ももにはちょっと多めに肉づけをして、かかとはでっぱりを意しきました。そうすると、前はひょろひょろだった足がちょっとぼくの足みたいになったのでとてもよかったです。これからも足をちょっと改良しつつ、うでなども作っていきたいです。 (児童B)

図工ではねん土とはりがねを使って、自分の春トレ中のポーズを作るというものです。私のポーズは30、40%のスピードから150%のスピードを出すレースで、すごくつかれていて完走したアノ時をイメージしました。最初ははりがねだけだったころがあったけど、そうとう変わり、すごくリアルにできました。私は今、服を着せるところをしています。服は、しわを表現しました。あと、風が前からふいたとき、服も後ろによるので、そこを表現しました。楽しかったです。 (児童C)

本学級の子どもたちは上の日記にあるように、自分が表したい人物の動きやその動きから生み出される形を意欲的に見つけ出そうとしている。それは、授業場面においても春季トレーニングで体験したことを想起したり、友だちと動作化したりしながら、針金による骨組みや紙粘土といった素材と向き合い、友だちと互いの構想を伝え合う姿からうかがい取ることができる。一人ひとりが自分の感性を働かせて考えをもち、発想したことや構想したことを図や文章などで表すことで意識化を図ることができる。また、それを生かしながら、人物を紙粘土で立体的に表す学習活動をする。その中で、自分の表現意図と向き合い、試行錯誤を重ねながら取捨選択をする。このような学級全体での学び合いや個人の学びを通して、自分らしい造形表現を追求しようとする子どもの姿が体现される。そんな学び合いの授業を構想していきたいと考えた。

(2) 本題材の目標や内容と図画工作・美術科で考える思考力・判断力・表現力の育成との関わりについて

本題材では、春季トレーニングや陸上競技大会での運動体験を生かして、人物が運動しているときの躍動感や力強さを形に表す。また、その際に感じた心情や感情を明らかにして、躍動感や力強さと関連づけながら、人物塑像として表したいことを追求し、作品にしていくことを本題材のねらいとする。

そこで、単元全体のねらいを学習過程の中ではっきりさせ、目的に沿って動作の特徴をとらえたり、言語化や図示により表現意図を明らかにしたりすることも本題材のねらいとする。そして、この活動を通して、子どもたちが心情や感情を意欲的に形に表そうとしたり、その構想に基づく人物の形の特徴を伝え合ったりする態度が生まれることを期待する。

そのために、子どもが自分や他者の学び方や表し方のよさを肯定的に認め合う姿を大切にしたい。ふりかえりやポートフォリオを介して発想や構想を見つめ直し、試行錯誤と取捨選択をくり返して、より

豊かな造形表現にせまろうとする学習活動を進めたいと考え、本題材を構想した。また、人物の動作やその形に関わるイメージや、表そうとしていることの意図や、考えや理由を自分なりに表す図や言葉に着目する。そして、自分の表したいことや仲間が表そうとしていることを感じ取り、形を手かがりにして伝え合うようにかかわり合う。このように、身近な友だちとかかわり合い、学級全体で学び合うことが、本学級児童の立体に表す活動や鑑賞についての感性を高め、発想や構想に深まりや広がりを与える。そして、造形表現における思考力・判断力・表現力が育成されるものとする。

(3) 11年間で育てる思考力・判断力・表現力の育成に関する学び合う場面の構想について

初等部後期では、子どもたちが造形表現の課題について構想を立て、表現の意図を説明したり構想についての考えを交わしたりして、自他の表現を評価・改善していく活動を大切にする。

①子どもの考えや感じ方を明らかにし、より広げ深めていくために

子どもたちが自分の造形表現について発想や構想を豊かにもち、それを基にして造形活動を展開させ追求していく力を身につけるためには、自分の考えを明確につかみ、造形表現の意図をはっきりさせることができるようになることが大切である。そのための一つの手法として、これまでも大切にしてきたふりかえりの活動と共に、ポートフォリオを用いた自己評価を学習活動の中に位置づけて展開する。ポートフォリオには、漠然ともっている表現へのイメージや製作の構想を文章に書き表したり、作りたい物のイメージを図やイラストに描き示したりする。さらに、活動のふりかえりや学習活動を観点に従って自己評価したものや次回活動への展望、作品の過程が画像によって記録されたものなど、様々な記録が集積されていく。これにより、子どもたちはいつでも自分の学びや考えを確認することができる。また、話し合う場面でもまわりの友だちや指導者が表現意図や考えを容易に把握し、論点を明確にもちながら学習を進めることができる。

指導者はこのポートフォリオや授業から子どもの姿をあらかじめとらえて、次時の活動を調整し、学び合いの場面を迎えることができるので、一人ひとりの考えを深め、造形表現を高めていくことができると考える。

②学級全体で学び合う時間を充実させていくために

第1次では、針金と麻ひもから骨組みを作る活動を行う。骨組みを「棒人間」と称して様々な動きや形を楽しみながら味わう。人物の立体感や量感をつかむと共に運動している人物の動きのおもしろさに出会わせ、興味・関心を高めたいと考えた。そして、形作った棒人間のポーズやそれを図に描き起こしたものを基に、友だちの感じたことやとらえ方と自分のそれについて伝え合う。主題に沿って表したいことをつかんだり、自分の表現のよさを認められる中で主題についての発想や構想を深めたり広げたりしていくことができると考えた。

第2次では、イメージ文を書くことで漠然ととらえていた人物の動きのイメージを明らかにする。子どもの考えや漠然としてもっている表現へのイメージの背景を引き出す。その結果、子どもたちはできあがりの方向性をつかみ、自分の心情や感情に基づく造形表現の意図を明確にして、表したいことがらを骨組みの形により正確に反映させることができると考えた。

また、この第2次では、骨組みに紙粘土の粗づけや肉づけを施し、躍動感や力強さが演出されるようにする。その中で、子どもたちが追求したいことを思い描き、具体的な形に表していく過程でつまずいたり、停滞したりしてしまう場面をとらえる。そして、その行き詰まりに対して、作り方の参考になるような具体物としてのサンプルやその技法、または、他の角度からの考え方や見方を「提案する」はたらきかけを行う。そのはたらきかけを行うことで、気に入った表し方を発見し、表すために必要な道具や手順に気づき、表したいと思っていることがらに迫っていきようとする子どもの姿を引き出したい。

第3次では、肉づけによってできてきた人物の概容に、顔や頭髪、衣服、手、必要に応じて小道具を作り、塑像の細部を立体表現していく。作品が進むにつれ子どもたちは必要感をもって細部の表現を求めようになると予想した。細部の表現は塑像自体により豊かな表情を与え、子どもたち一人ひとりの表現意図と結びついて、造形表現としての立体作品の質を高めることができる。そのためにはそれぞれの部位について全体の形とのバランスや、表現意図との関連を一つ一つ明らかにしていくことが大切で

ある。以上のように、学級全体で共通の論点や視点をもって、よりよい表し方についての考えを伝え合う場面を設定することで、学級全体で学び合ったことが子どもたち一人ひとりの取り組みに還元され、発想や構想が確認されたり、更新されたりする。子どもが表したいと考えていることについてのたくさんの発見やつかみ取った方法から判断して、取捨選択していきながら、自分にとって満足しうる造形表現を追求する姿の実現を期待する。

③授業と子どもの活動を評価し教師のはたらきかけに反映させていくために

まず、子どもたちが自分自身の造形表現活動についてしっかりととらえることができるようにしたいと考えた。同時にそれは指導者が子どもの取り組みをとらえ、子どもの活動やその結果から授業を評価することにもつながると考えたからである。子どもが何を表したいと感じ、何を表そうと意図し、発想や構想についてどのように考えているのかを明らかにする。それらの記録をポートフォリオとして画像やスケッチと共に集積し、子ども自身がそれまでの取り組みについてポートフォリオを通してふりかえり確認することができるようにする。現在の子どもたち一人ひとりにどのような表現に対する必要感があるのか、また、今後どのように表現を展開させていきたいと考えているのかをつぶさに拾い上げるためには、子どもたち自身にそれらを十分に把握できるような機会と場が必要であると考えた。

したがって、学び合っている場面での子どもたちの発言やふりかえりの場面での記述を大切にしたい。そのために、子どもたち一人ひとりの学びに関わるとらえをワークシートや観察から評価規準を基に行い、その変容をとらえていく。ワークシートを活用して、子どもたちが自分の造形表現の足跡や工夫改善していく過程を自らとらえ、評価し、次の活動に向けて発想や構想を発展的に更新しながら、造形表現への意欲を高めることができるようにしたい。

2 展開計画

次	主な学習	時	具体的な学習・内容(◇印は、学級全体の学び合いの場面)
1	人の形のバランスを考えて骨組みを作ろう	1 2 3	・針金と麻ひもで人体の骨組みを作る。手や足の長さを意識してバランスよく形を決める。 ◇骨組みの手足を動かして、表したい動きについて意見を交わしながら構想を練る。
2	表したい動きをイメージ文に表そう 骨組みのポーズを決めよう 表したい動きをはっきりさせよう 力がこもるイメージで肉づけをしよう	4 5 6 7	・表したい動きについてイメージ文を書き、感情や動作による人体の形の特徴を明らかにする。 ◇イメージ文と骨組みのポーズを比較したり、友だちと印象を交わしたりしながら、表したい動きについて考えを練り、ポーズを決定する。 ・ねん土の粗づけを経て、肉づけをする。骨組みのポーズを生かす肉づけを追求する。
3	動きを生かすように細部を作ろう 「動きを感じる衣服」 「あときはどんな表情かな」 「あの手この手、決め手はこの手」	8 9 10 11	・肉づけにより躍動感や力強さなどを表した塑像が、より効果的に演出されるように細部を施す。 ・衣服、表情、頭髮、手の順に試行錯誤しながら細部を作り込む。 ◇塑像全体の形から最も適した手の動きや形について友だちとともに見つけ出し、自分の作品に取り入れる。
4	あざやかに仕上げよう 「色で命を吹き込もう」	12 13	・彩色を行う。 ・ニス仕上げを行う。

3 学び合いによる思考力・判断力・表現力の評価

単元および題材の構想において設定した学び合いの場面を中心に、学習記録をとり、教師の「提案する」また、「掘り下げる」はたらきかけが子どもの思考や判断にどのような影響を与えたのか、分析を行った。全時間を通して学級全体で学び合っている場面だけでなく、指導者が子どもの必要に応じてかわっている場面や、子ども同士の話し合いの場面で考えをつないだり、確認したり、問い直したりしている場面など、より詳細にとらえることも試みた。教師のかかわりや子ども同士のかかわり合いが互いにどのような効果をもたらしたのか、そして、教師のはたらきかけが子どもの変容に有効に働いたのかを検証する。

また、学び合いを構想した時間については、次の評価規準に基づいて、子どものワークシートやふりかえりを評価し、学び合いの有効性についても子ども自身の自己評価として記録を取り、授業評価の一助とした。また、ポートフォリオを用いることで、子ども自身が記録画像やスケッチ、記述したことなどを確認しながら作品の過程をたどり、自分の表現や構想の変容を確認することができるようにした。

単元および題材を通して子どもの思考力・判断力・表現力がどのように高まったのかを評価するためにアンケート調査による分析を行う。また、学習活動の中で子どもが「イメージ文」を記述することで子どもの課題意識を明確にすることになり、同時に教師は子どもの追求がどのように向かおうとしているのかをとらえることにもつながると考える。

次	時	学習活動	学習活動における具体的な評価規準	評価資料	評価基準		
					A	B	C
1	3	骨組みの手足を動かして表したい動きについて考える。	骨組みから立体的に人物の動きをとらえ、表したい動きについて友だちと意見を交わし、試行錯誤しながら考えたりポーズを決めようとしたりしている。	発言 作品 ふりかえり カード	友だちと動きのポーズをとり合い、意見を交わしながら、その動きや形の特徴を十分にとらえて骨組みのポーズを工夫している。	友だちの意見を参考にしながら自分の考えを明らかにし、人物の動きや形の特徴をとらえて骨組みのポーズを考えている。	抽象的なイメージや先入観のみを頼りにして、安易に形を決めて、表そうとしている人物の動きの特徴が骨組みに反映されていない。
2	4	イメージ文と骨組みのポーズを比較したり、友だちと印象を交わしたりしながら表したい動きについて考えを練り、ポーズを決定する。	作った骨組みやイメージ文やアイデアスケッチを生かして構想したことをもとに、友だちと表そうとしている動きについて意見を交わし、考えを広げたり深めたりしようとしている。	ワークシート 発言 作品	自分が表そうとしている動きの主題や感情や心情などについて、骨組みに形となって反映されているかどうかを丁寧に検討したり、よりよくなるように考えを練り直したりしている。	自分が表そうとしている動きの主題などについて、骨組みに形となって反映されているかどうかを検討したり、確認したりしている。	自分が表そうとしている動きの主題と、骨組みの形に関連性がなく、表したいことの確認ができていない。
3	11	塑像全体の形から最も適した手の動きや形について友だちと共に見つけ出し、自分の作品に取り入れる。	表された人物の形やそれによる動きのイメージをもとに、作りたい手の形について、友だちと意見を交わしながら、自分の考えを明らかにしたり、よりよい表し方を見つけて出そうとしたりしている。	発言 作品 ふりかえり カード	自分が表そうとしている動きの主題や感情や心情などについて、塑像全体の形と手の形を関連づけながら、よりよくなるように工夫して手の形を決めようとしている。	自分が表そうとしている動きの主題などについて確認し、塑像全体の形に合うように工夫して手の形を決めようとしている。	自分が表そうとしている動きの主題や塑像全体の形と手の形に関連性がなく、表現へのこだわりを持って考えることができない。

4 授業の実際

○骨組みの手足を動かして表したい動きについて考える。(第1次 3時間目)

「ぼう人間をよりリアルに」

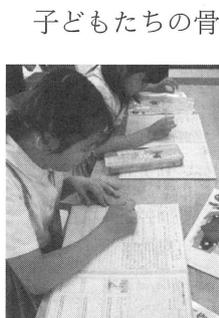
今日はぼう人間をよりリアルにするため、かたはばやこしはばをつけるということを教えてもらいました。でも、まだぼくはできません。わけは、一度終わりかけたけど、どうたいが長くてまた作り直したからです。でも、次回やったらぜったいに作って、かたはばをつけて、色々なポーズをためしたいです。(児童D)

この時間まで、針金と麻ひもを使って紙粘土の心材となる人間の形を作っている。児童Dのように「リアルにしたい。」という思いをもち、そのためには手足の長さのバランスをとらえることや、人間の動きや正面性を出すために肩幅や腰幅をとらえないといけないということを、友だちと相談しながらつかんできている。また、骨組みとなる「棒人間」を作る中で、バランスを取る必要性から、自然と表したい動きを試して形にしてみようとする様子が出てきた。つまり、表したいことに向かおうとする子どもたちの必要感が、人間の形をバランスよくとらえ、形に表したいという欲求に重なったと考えられる。これらの活動は全て友だちとのかかわり合いの中で進んでいる。友だちに自分が作っている物についての出来栄を尋ねることや、モデルになってポーズをとってもらうように依頼すること、試した動きや形をお互いにおもしろがって楽しもうとすることは、促す必要のない自発的な子どもたちの取り組みであった。

この時間は教師のはたらきかけとして掘り下げることを行った。走っている動きの形に対して、どんなときにどんな思いをもって、または、どんな感情の中でその動きがなされているのか、子どもの考え

の背景を子どもと共に明らかにした。すると、子どもは改めて表したいことをとらえ直して考え、周囲の友だちの反応も感じ取りながら判断し、わずかな腕振りの角度にこだわったり、時には間接を無視してしまうようなダイナミックな形を表したりすることができた。

○イメージ文と骨組みのポーズを比較したり、友だちと印象を交わしたりしながら表したい動きについて考えを練り、ポーズを決定する。(第2次 4時間目)



今日つかんだことは…。

子どもたちの骨組み作りが一段落してきた頃には、十分に骨組みに触れ、動きと形を試し、自分の考えに近づけてきている。そこで、表したい動きを確認して決定していくステップとして、イメージ文の作成を行った。これまでに自分が表そうとしている動きを豊かに形に表すために、その場面やその時の感情や心情を文章に言語化することによって、しっかりと意識化させることをねらいとした。文章に書き表したことで、目の前にある骨組みが一致したものであると感じることができると子どもたちに提案した。また、自分だけではなく、周囲の友だちにもイメージ文を共通の視点にして作品を鑑賞し、学び合うことができた。



本当にこれでいいのかな。

また、教師が用意した3つの「一番速いスタートダッシュをする」骨組みについて、どれが一番伝わるか、もっとよくするためにはどうしたらよいかという論点で、学級全員で考えを出し合う活動を行っている。その活動の経験が、子ども一人ひとりの表そうとしている動きについて考える意識を高めることにつながった。

本学級児童による自己評価(第2次 4時間目)

- ・自分や友だちの表現のよさが分かった。63%
- ・意見交換で表したいことがはっきりしてきた。37%
- ・次の活動でやりたいことがはっきりしている。81%
- ・前回よりもよい表現になった。85%

人形の動きは、たてから見たり横から見たりすると形がちがいで、どうやって決めるかあせりました。

表したい動きをはっきりさせました。同じポーズなんだけど、ちょっとしたこだわりで手を動かしました。自分で作ったのにかっこよかったです。

イメージ文を完成させました。私はバトンをもらうしゅん間をイメージしました。動きでこだわったことは足をかまえるようにすることをこだわりました。肉づけでこだわりたいところは、立体感を見せることです。

○塑像全体の形から最も適した手の動きや形について友だちと共に見つけ出し、自分の作品に取り入れる。(第3次 11時間目)

この時間までに、紙粘土の粗づけや肉づけは進み、進度が早い子どもは衣服や髪の毛、顔の表情や手の形にこだわりをもちながら、細部の作り込みや仕上げに向かっていた。「手をどうやったらうまく作れるのか。」というふりかえりから、①紙粘土で手を作るための技能面での支援を求めている②表したい動きにあった手の形を構想する面での支援を求めているという点を見取ることができた。そこで、紙粘土で簡単に手の形を作る方法の一例を示すことと、動きにあった手の形について学級全体で学び合う場を設定した。教師が用意した塑像と左右それぞれ4種類の手のサンプルモデルを見て、どれが適しているか、さらにはよりよい物を作るとしたらどのような物がよいかについて、考えを伝え合った。この学び合いのスタイルは骨組みのポーズを決定づける場面でも同様に行っている。



この動きの表し方のいいところは…。



作品①

学び合った後の子どもたちのそれぞれの取り組みについて、作品やポートフォリオから評価規準によって分析を行った。評価Aに相当するものとして、作品①、作品②などがあった。作品①については、転びそうになりながら走り出した一瞬の躍動感をとらえ、手のひら全体で転ぶまいとバランスを取る様子



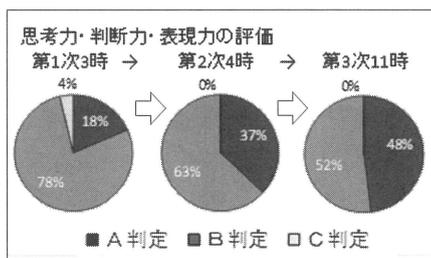
作品②

が形に表れている。作品②については、カーブで体を傾けながら切れ込んで走り抜けようとする、「前かがみで気合いが入った走り」そのものが手の表現によってより豊かになっている。全体で学び合ったことが個人の作品作りに反映され、形をとらえることに対する思考力・判断力・表現力の高まりを見て取ることができる。

5 成果と課題

思考力・判断力・表現力を育成する観点から造形表現活動を考え、視点を明確に共有しながら学級全体で学び合う場を設定し、高め合う授業作りに向けて単元構想を組んだ。イメージ文やポートフォリオを用いて言語活動の充実化を図り、表現主題の明確化や意識化を図った。また、共通の視点で互いの学習の成果を鑑賞し合うことや、自己評価を充実させる環境を整えた面においても成果としてとらえている。学習後の児童の意識調査では、学級全体で学び合ったことについて、9割の児童が肯定的にとらえている。残りの1割の内容を見ると、否定的と言うよりは、学び合いの経験が自分の判断からは必要と感ぜられなかったことによるものであった。造形表現の追求の様子や過程を取り上げることで、自分の言葉や形に表すことで説明したり、自分自身の考えを明らかにしたりすることができた。

子どもの作品はリアルタイムに変化していくため、過去をふりかえることやそれまでの経験をふまえて表現活動に見通しをもつことは難しい。その場その瞬間の感性の働きや直感によって造形活動は進められ、その成果としての作品を見ることが多い。しかし、ポートフォリオとして記録を蓄積していくことで、じっくりと子どもが自分の学びや造形表現の向上を確認したり、指導者がそれを作品と共に検証したりすることができた。



このような成果を得るに当たり、「掘り下げる」「提案する」ことを中心に据えて教師がはたらきかけを行ったことは、効果的であった。造形表現を追求するに際し、漠然とした発想や構想を曖昧なままにして表現活動を展開することが多い。その自由さもよさとして否定しないが、思考力・判断力・表現力の育成を視点に子どもの学びを高めていくためには、どのような意図をもってどのように表したいのか、どのような感情や心情が働いているのかなどについて、「掘り下げる」問いかけをして、作品とのつながりを意識し、作品への思いが満たされるかどうかを検証することも有効な手立ての一つであると考えられる。また、子どもたちの既存の経験の枠を超えて造形表現を追求するためには、子どもの必要感に応じて、試したり取捨選択したりする機会を保障することが大切である。必要感そのものを刺激したり、試したいことの幅を広げたりする上で「提案する」ことは有効である。また、子どもの個人思考と集団思考をつなげ学び合いを活性化させる上では、「掘り下げる」ことや「提案する」ことも有効である。

この単元構成ではスモールステップで表現活動が進むため、誰もが一定の水準を維持しながら楽しんで作品作りに取り組めるというよさがある。その反面、図画工作ならではの起こりうる、ある瞬間の感性的な閃きや偶然性によって、飛躍的に超越した造形表現を生み出す状況が出にくかったのではないかと、この点が今後の課題である。図画工作の題材や単元を構想する際に、子どもの必要感をとらえ直して、題材の要素となる素材・テーマ・表現方法のどこを子どもにまかせるのかをより明確にするようにしたい。

この単元構成ではスモールステップで表現活動が進むため、誰もが一定の水準を維持しながら楽しんで作品作りに取り組めるというよさがある。その反面、図画工作ならではの起こりうる、ある瞬間の感性的な閃きや偶然性によって、飛躍的に超越した造形表現を生み出す状況が出にくかったのではないかと、この点が今後の課題である。図画工作の題材や単元を構想する際に、子どもの必要感をとらえ直して、題材の要素となる素材・テーマ・表現方法のどこを子どもにまかせるのかをより明確にするようにしたい。

ポートフォリオの活用については評価資料として、また、子どもたちの評価アンケートにおいて高い有効性を実感することができた。成果としてとらえ、継続して実施し、その実践を積み上げていきたい。

(文責 三桐 撰夫)

資料：学習後の意識調査アンケートより

